

研究課題 78

「スウェーデンで学ぶ SDGs プログラム」の報告

田部 俊充（人間社会学部教育学科）

浅野 由子（家政学部児童学科）

発表前半は田部から、総合研究所研究課題 78「スウェーデンで学ぶ SDGs プログラム」（2021 年 4 月 1 日～2024 年 3 月 31 日）の研究概要、進捗状況を報告した。

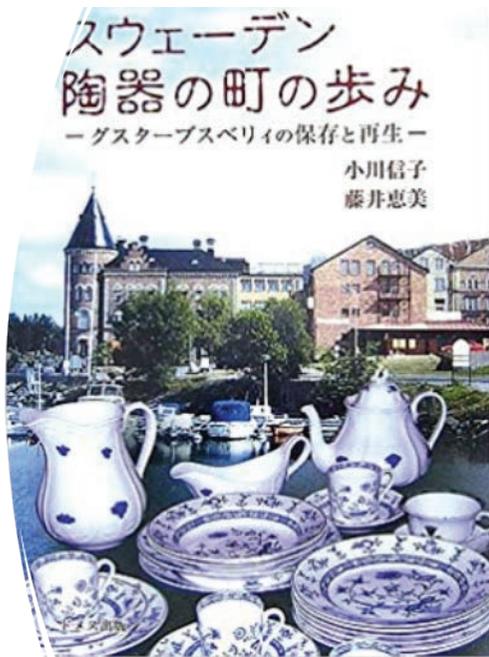
最初に研究概要を報告した。本研究は、スウェーデン海外研修を充実させ、ウプサラ大学との SDGs プログラムを開発し全学共通科目を開発することを目的としている。スウェーデン海外研修は、2014 年、2015 年、2016 年度と継続して得た日本女子大学特別重点化資金（定行まり子代表）により学内の学際領域による研究者の合同調査を行い、共同研究として就学前教育から高等教育までの調査内容を ESD の視点でまとめたことによりスタートした（田部ほか 2017）。

特別重点化資金の成果等を踏まえ、大学公認海外短期研修として、2016 年度（2017 年 3 月（第 1 回））36 名引率：請川先生（児童）と田部（教育）、2017 年度（2017 年 9 月（第 2 回））23 名引率：定行先生（住居）、請川先生（児童）と田部（教育）、2018 年度（2019 年 3 月（第 3 回））63 名引率：定行先生（住居）、宮崎先生（化生）、和田上先生（児童）と田部（教育）で実施してきた。2019 年度（2020 年 3 月 第 4 回）も予定し、30 名の応募者があったがコロナ禍で延期とせざるを得なかった。2022 年 4 月には 2022 年度スウェーデン海外短期研修の募集を開始した。説明会には 200 名以上の学生が殺到し、120 名の学生が応募したため、抽選を行い、37 名の参加者で進める予定である。

また学校との地域連携活動について報告した。田部は研究課題 54「大学の総合力を発揮した地域連携活動の試み」（2012 年 4 月 1 日～2015 年 3 月 31 日）の代表者として西生田キャンパスの「多摩区・3 大学連携事業」の協定、共同シンポジウムやフォーラム、川崎市や狛江市との「連携・協力に関する基本協定」を進めた。また研究課題 61「日本女子大学における学生を主体とした地域連携活動の活性化のための調査・研究」（2015 年 4 月 1 日～2018 年 3 月 31 日）の代表者として、地域連携活動を推進した。「学校教育ボランティア」「学校インターンシップ I・II」の授業科目化を行い、川崎市多摩区、東京都狛江市、附属幼小、私立幼稚園との連携活動、附属豊明小学校との授業を通じた研究協力を進めてきた。

本研究の目的は、「スウェーデンとの国際研究協力」と「課題 54、課題 61 で追究してきた地域連携活動」を連携させることにある。特に、スウェーデン海外研修を充実させ、全学共通科目の開発することを目的とした。

具体的には、①海外短期研修の事前調査（ウプサラ大学、就学前教育学校、義務教育学校、高等学校）を行って充実を図る。②学内の教育・児童・環境・SDGs（持続可能な開発目標）の研究者による海外研修の事前指導を充実させ、全学共通科目として単位化を図るとともにウプサラ大学と SDGs プログラムの共同開発を行う。③地域連携活動としての教育機関との連携で附属をはじめ東京都教



育委員会、文京区、豊島区、中野区、板橋区、川崎市、横浜市の各教育委員会との連携を実績として、ウプサラ大学との国際研究協力を行いたい。その結果、双方の研究者、学生とも多くの成果を期待できる。

本研究の第1の特色は「日本女子大学とスウェーデンとの関わり」で故一番ヶ瀬康子氏（人間社会学部社会福祉学科名誉教授）、小川信子氏（家政学部住居学科名誉教授）をはじめ、多くの実績がある。学際的に調査、研究し、本学との関係を発展させることは意義深い。

ストックホルムでの下見調査では子どもの住環境が専門で、コレクティブ・ハウジングを日本に初めて紹介した小川信子氏のご著書の表紙の素敵な街並みのデッサンに魅せられて、市の中心から30分ほどバスでいったところにあるグスタープ

スベリイの街をまわった（小川・藤井 2006）。ストックホルムでの自由行動の際の学士の訪問地の候補として紹介したい。

第2の特色は「全学の学生を対象とした学際領域的な研修」で引率教員の学際領域的な研究を海外研修のベースにしている。多様な内容の研修であることが全学の学生・大学院生たちの根強い支持を集めている。

第3の特色は「国際研究協力・地域連携活動の連携」である。地域連携活動としての教育機関との連携を、附属豊明幼稚園、豊明小学校、附属中学校、附属高等学校をはじめ東京都教育委員会、中野区教育委員会など多くの学校と行ってきた。2017年には海外短期研修を契機にしてウプサラ大学教育学部と本学が協定校提携を結んでいる。2021年7月2日には日本女子大と中野区の連携協定締結を結んでいる。これらの実績をもとにしてウプサラ大学と国際研究協力を深めていきたい。

2021年11月25日（木）15:00-18:00（スウェーデン・ウプサラ時間 7:00-10:00）には、「[スウェーデンで学ぶSDGsプログラムー全学共通科目の開発ー] 公開シンポジウム」（百二十年館12001 教室 Zoomによる同時配信）を開催した。詳細は後半の児童学科浅野由子氏の報告を参照して欲しい。

2022年1月25日（火）には児童学科浅野由子氏が附属豊明幼稚園年長組3クラスにて、自然に関するワークショップを実施した。<https://www.jwu.ac.jp/knd/>（豊明幼稚園 HP にワークショップの様子掲載）

2022年2月17日（木）には児童学科浅野由子氏がFDセミナーにて、ウプサラウィークやワークショップにおける活動報告を行った。

2022年3月12日（土）-13日（日）には住居学科定行まり子氏、化学生命学科宮崎あかね氏、児童学科浅野由子氏が山形県金山町のめぐたま園を訪問した。理事長から持続可能な社会への取り組みを聞き取りした。

2022年3月には児童学科浅野由子氏がウプサラ・フェア、ウプサラ・ウィーク、ワークショップの報告書をまとめた。

2022年4月には2022年度スウェーデン海外短期研修の募集を開始した。

2022年9月には田部と児童学科浅野由子氏がスウェーデン海外短期研修下見・調査・打ち合わせを行った。主な下見・調査・打ち合わせは以下の通りである。

- ・ウプサラ大学留学生サラさんとの打ち合わせ
- ・ウプサラ大学ペロニク・シモン氏宅を訪問
- ・ウプサラ市内就学前学校訪問（Ringmurens förskola）
- ・ウプサラ大学教育学部訪問（教育学部長、カタリーナ国際交流課長、カールウプサラ市副市長）



写真 左からウプサラの就学前学校（Ringmurens förskola）、ウプサラ大学教育学部

田部はストックホルム市及びフランス国内のスウェーデン海外研修関連施設の調査を行った。主な下見・調査地は以下の通りである。

- ・ストックホルム北方民族博物館、国立美術館
- ・フランス・ノルマンディー地方、バイユー・タペストリー美術館

2023年3月実施の第4回スウェーデン海外短期研修ではストックホルム及びウプサラ市内の自由行動の時間があるが、資するような調査を行った。加えて、2023年9月実施の第5回スウェーデン海外短期研修の候補地としてスウェーデンとの関係の深いフランス・ノルマンディー地方やパリも含めて視察した。今回の下見・調査の成果は『スウェーデン・フランスからみるヨーロッパ理解のための世界地誌教材の開発』として、2023年3月発行予定の人間社会学部紀要第33号に投稿中である。

2022年9月には今回のスウェーデン海外短期研修下見の成果を附属豊明小学校への出前授業（田部研究室の4年生3名、3年生13名、教育学2年生1名も同行）で早速活かすことができた。9月13日（火）5年さくら組、9月14日（水）5年わかば組、9月16日（金）5年かえで組において実施した。ウプサラ大学留学生のサラさんと小学生の交流が好評だった。



写真 附属豊明小学校での出前授業の様子（2022年9月13日 5年さくら組）

（左から多目的教室全景、ワークシートの課題に取り組む5年生、地球儀や「イマジン」から世界について考える）

今回の総合研究所研究発表会に附属豊明小の桑原教諭も参加して下さり、研究課題78による研究について、「近年の私立小学校志望者層は国際交流に魅力を感じる方が多い」「取り組みに参加できることは有り難い機会」と一貫教育の点からも意義があると評価して頂いた。第4回海外研修中の2023年3月7日に遠隔で児童同士、教員同士の日瑞交流の可能性を検討することができた。

（田部俊充）

次に、昨年開催された本学120周年記念企画のウプサラ・フェアと学生主体の企画のウプサラ・ウィークについて報告する。まず、本研究課題メンバーで、公開シンポジウム「スウェーデンで学ぶSDGsプログラム—全学共通科目の開発—」を、2022年11月25日（木）15:00-18:00（スウェーデン・ウプサラ時間 7:00-10:00）に開催した。場所は、日本女子大学120年館12001で、スウェーデンとの中継も交えて、Zoomによる同時配信をした。司会は、本学の宮崎あかね氏（理学部化学生命科学物質生物学科教授）第1部は、プロジェクト説明を研究代表の田部先生からしていただき、その後、スウェーデンと日本からの特別ゲストスピーカーによるご講演があった。日本からのゲストスピーカーは、本学とスウェーデンとのかかわりについて、「スウェーデンと日本女子大学のかかわりの歴史」と題し、小川信子氏（日本女子大学名誉教授）に、日本語によりご講演いただいた。その後、スウェーデンのカール・リンドベリ氏（ウプサラ市議会副議長）に「ESD/SDGsの歴史と意義」、その後、レイフ・オストマン氏（ウプサラ大学・教育学部教授）に「ESD/SDGsのカリキュラムと教材」についてご講演いただいた。リンドベリ氏からは、2006年から、スウェーデンでは、高等教育法（Swedish Higher Education Act）において、スウェーデンのすべての大学において、SD（持続可能な開発）を推進してきているということ。そして、SDを推進していくには、就学前施設、学校、大学における日常、長期計画におけるガイドラインになる必要性を指摘され、教師と研究者、生徒と学生、そして保護者や地域社会の代表者が、持続可能な社会の発展の為に学校・大学の活動をどのように位置づけるべきかを議論し、明確化することを求められていることが指摘された。そして、最終的にSDの実現には、スウェーデンや日本だけでなくすべての国々のマインドセット（心構え）や姿勢そして教育システムを組み替えなければならないということを強調された。次に、「ESD・SDGsのカリキュラムと教材」を発表されたウプサラ大学教育学部教授のオス

トマン氏からは、世界の大学において、サステナビリティ教育を、大学のプログラムやコースに組み込んでいくことは、SD（持続可能な開発）に向けて重要なアクターとなることを指摘された。特に、ウプサラ大学が欧州のコンソーシアム“ENLIGHT”に加盟し、欧州の9大学と、地域社会をはじめとする主要なステークホルダーと協力して教育を行う共通ミッションを持って活動されていることをご紹介いただいた。1つ目のプロジェクトは、研究者と実践者による教育実践ラボ“Te Plab”であり、2つ目のプロジェクトは、チャレンジベースの教育を成功させることを目的としたレッスン・デザイン・ワークショップ“LORET (Local Relevant Teaching, loret.se)”である。シンポジウムの第2部では、日本語で、「ESD/SDGs に向けての本学のカリキュラム・教材開発の可能性を探る—ウプサラ大学元留学生や現留学生の体験や本学学生との対談を通して—と題し、元留学生（英文学科学生）や当時留学生（児童学科学生）、そして現役の学生（教育学科田部研究室学生2名）に、スウェーデンでの講義内容や日本での講義内容を踏まえた上で、カリキュラムや教材開発の可能性を探る企画をした。

第3部では、国際交流課が司会をされ、ウプサラ大学と日本女子大学の学生交流交流を、英語と日本語を使用して開催した。はじめに、日本女子大学とウプサラ大学の当時留学候補学生（本学英文学科、ウプサラ大学教育学科）から「私の大学紹介」をしていただいた後、「ウプサラ大学での留学生活について」本学の当時留学生3名（英文学科、住居学科、教育学科）の発表があった。最後には、ウプサラ大学と日本女子大学の学生交流を Zoom で数グループに分かれて行い、英語による活発な国際交流の機会を得た。

また、本学120周年企画としてウプサラフェアと並行して行われたウプサラウィークについて紹介する。この試みは、2019年春に北欧研修に参加した学生が主体となって、企画構成をしたものである。時期は、2021年10月上旬・中旬に亘り行われ、大学での企画発表と企画採用通知が、10月下旬にあり、学生課や泉会の支援により、企画が進行した。本企画の趣旨は、北欧で学生が体験したFIKA（お茶の文化）を日本に紹介したいということ、そして子ども達への読み聞かせ活動を通して、特に、子ども達に多文化や自然保護に、触れて欲しいというものである。11月には、児童学科の講義やゼミでのスウェーデン環境・文化・歴史の講義や紙粘土を利用したお菓子づくり体験をはじめとした活動が行われた。特に、IKEAのインテリアコーディネーターとの打ち合わせをしながら、「読み聞かせ」の空間を再現した。更に、本学の豊明幼稚園の園児と教職員との交渉や打合せから、イベントの準備が行われた。ミニ講座として、スウェーデンの紹介する企画も行った。ミニイベント講座では、児童学科浅野より、「スウェーデンのこども環境」を紹介し、ウプサラ大学の元留学生である英文学科大学院生の藤野あゆなさんによる講座「ウプサラ大学への留学体験」IKEA原宿 マーケットマネージャー、ヨルゲン・スヴェットルンド氏による講座「男女平等と多文化共生」が開催（好評により zoom 配信あり）された。

終了後は、縦の会（児童学科OG会）から表彰され、泉会での発表報告を学生が行う等、本学の一貫教育への貢献を評価された。

また教員としての活動として、児童学科浅野は、2022年1月25日（火）9時半～13時20分に、豊明幼稚園でのワークショップ—保育現場との協働の学び—を行った。特に、年長組3クラスにて、

自然に関する活動を行い、豊明幼稚園が近年取り組んでおられる SDGs の堆肥活動と関連し、子ども達が自然に親しみながら、自然環境や多文化理解を促す活動を行った。また事前の打ち合わせを、2022年1月18日(火)16時～17時、年長組3クラス担任との打ち合わせ(新泉山館5階浅野研究室)を行い、研究者と実践者とのつながりを深めることが出来た。<https://www.jwu.ac.jp/knd/>(豊明幼稚園 HP にワークショップの様子掲載)更に、2022年2月17日(木)に開催されたFDセミナー(日本女子大学教育賞の発表)として、ウブサラウィーク・ワークショップにおける活動報告を行った。特に、企画を通して、1) 学生1人1人が、本学の教育理念である「自学・自動」の精神を發揮し、社会に貢献する姿勢を学ぶ。2) グローバルな視野から、物事を判断出来る学生を育てる。(SDGs 4.7 = グローバル・シティズンシップ教育) 3) アクティブ・ラーニング(主体的・対話的・深い学び)(中央教育審議会2016)につながる活動として意味があり、本学の見学の精神である信念徹底・自発創生・共同奉仕を活かし、(地域・国際)社会に貢献出来る学生や研究者を育てることに寄与していることを紹介した。またこの学びの思想は、アメリカの思想家のジョン・デューイの実用主義の哲学、“LEARNING BY DOING”にも通じていて、今後SDGsの実現にも求められている大学の域学連携モデルとなる可能性を示唆した。

最後に、本年2022年3月12日(土)～13日(日)に、日本における持続可能な社会への取り組みを調査する目的で、山形県金山町社会福祉法人めぐたまに、研究メンバーである定行まり子氏(住居学科)、宮崎あかね氏(化学生命科学科)浅野由子(児童学科)で訪問した。特に、金山の木材(金山杉)を活かしたまちづくり(金山住宅、里山再生事業、馬)を中心に、100年計画のまちづくりの概要について調査した。また社会福祉法人めぐたま視察を、食育、障がい児教育、ホースセラピー事業といったSDGsにつながる多様な活動について、園長先生に、聞き取り調査を行った。更に、若者による地域貢献活動についても、視察をしました。特に、山形大学、都内数々の学生による地域おこし活動やサークル、ボランティア活動との連携といった視察も行った。更に、今後の地域・国際交流活動として、サマーキャンプの可能性についても検討した。(浅野由子)



文献

- 小川信子・藤井恵美(2006)『スウェーデン陶器の町の歩み—グスタープスベリイの保存と再生—』ドメス出版
- 田部俊充・浅野由子・請川滋大・高野由美子・定行まり子・葉袋美奈子・加藤美由紀(2017)「スウェーデンにおけるESDの取り組み—ウブサラ大学との研究教育協力・連携を目指して—」『日本女子大学人間社会学部紀要』27号、pp.71-85.